

静岡・中屋遺跡 なかや

- 1 所在地 静岡県浜松市根堅
- 2 調査期間 二〇〇四年(平16)五月～二〇〇五年三月
- 3 発掘機関 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 高見健司・佐々木和也・中谷哲久・武田寛生
- 5 遺跡の種類 居館跡・自然流路
- 6 遺跡の年代 古墳時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(天竜・磐田)

中屋遺跡は、天竜川が形成した低位段丘上に位置し、遺跡の東側には大門川が流れる。第二東名高速道路建設事業に伴い、二〇〇〇

年から、約二三〇〇〇㎡を対象に発掘調査を行なっている。

その結果、古墳時代から近世までの遺構が確認されているが、中心となる遺構は、鎌倉時代の居館とその東側に隣接する自然流路である。居館は溝により長方

形に区画され、内側には土塁が構築されている。溝は幅約四m深さ二m以上で、箱堀状の形状を呈し、居館の南辺では、東西一六〇mもの規模に及ぶことが明らかとなっている。また、区画の東南隅には、溝内の雨水を東側の自然流路へ排出するための溝が付設されている。

自然流路の両岸には、護岸施設が設けられており、その築土中から、漆塗りの鞍とともに、ヤダケの束と呪符木簡が五点出土した。鞍は前輪・後輪・居木が組まれた状態で出土しており、完全な状態



鞍出土状況



(5)



(4)



(3)



(2)



(1)



(5)



(4)表



(3)



(2)



(1)

での鎌倉時代の鞍の出土は、全国初の事例である。これらの遺物は、ヤダケの束の上に呪符木簡を五枚重ねて置き、さらに上から鞍を被せた状態で出土した。築土下の旧地表面に接して出土しており、上層からの掘り込みも確認されていないことから、護岸工事に先立って行なわれた地鎮などの祭祀行為に伴って埋納されたものと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「符籙」急々如律令 春
143×25×2 051
- (2) 「符籙」急々如律令 夏
138×24×3 051
- (3) 「符籙」急々如律令 秋
131×25×3 051
- ・ 冬
128×25×3 051
- (5) 「符籙」急々如律令
128×24×2 051

下部が欠損するものもあるが、いずれも上端が圭頭形に削られており、下部は徐々に細くなる。厚さは一・五～三mmと、非常に薄い。樹種はヒノキ。いずれも表面を上にして、上から(1)から(5)の順に五枚重ねられた状態で出土している。

(1)は上下両端ともに完存。右下にやや小さく「春」の字がみられる。下端では二mm程の厚さがあるが、上端では一・五mmと非常に薄いつくりとなっている。(2)は下端部が一部欠損しているが、ほぼ完存している。右下に「夏」の字が書かれている。厚さが平均して三mmほどあり、五枚の中では比較的厚い。(3)は下部が欠損する。上部から下部に向かって徐々に薄くなり、下部では一mmほどの厚さしかない。右下に「秋」の字がみられる。(4)は下部が欠損する。欠損部には「令」が書かれていたものと推測される。五枚のうち、唯一裏面にも墨書がみられる。裏面のほぼ中央に「冬」の字が書かれている。(5)は下部が欠損。厚さは平均して二mm弱と、五枚の内でも最も薄いつくりである。また、表裏いずれの面にも四季の表記はみられない。

木簡の年代については、現在整理作業中であり、今後検討が必要ではあるが、流路の埋土及び護岸施設の築土中より出土した土器の年代観などから、一三世紀の中頃から後半にかけてのものである可能性が高い。

9 関係文献

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『年報』二二(二〇〇五年)
同『発掘物語しずおか』一一五(二〇〇六年)

(武田寛生)